

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 14 日現在

機関番号：14401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K21121

研究課題名(和文)人工妊娠中絶の心理的サポートの現状とニーズ

研究課題名(英文)Present situation and needs of psychological support for an abortion

研究代表者

菅生 聖子(SUGAO, Shoko)

大阪大学・人間科学研究科・助教

研究者番号：50637139

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は人工妊娠中絶をはじめとする周産期喪失をした親の退院後の心理的側面とそのケアの現状、具体的ニーズを調査・検討することが目的である。中絶をした親とそのケアに携わる医療従事者に調査を行い、親の心理的プロセスと、そのプロセスに医療スタッフの思いが影響していることを明らかにした。また、亡くなる子との関係も重要であり、親が周囲に求めるものは「我が子」への眼差しであり、「この子がちゃんと居た」ことを共有できる関係であることが示された。医療者は臨床では困惑しながらケアのあり方を身につけ、それらは親の心理的サポートにも影響を与える。今後、臨床で具体的なサポート実践につながることを期待できる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to investigate and examine the psychological aspect of parents who experienced perinatal loss including artificial abortion (abortion) and their current situation and specific needs. It was conducted questionnaires and interview surveys for parents who had an abortion and medical professionals involved in their care. The psychological process of the parent was revealed. It was also revealed that the explanation of the medical staff and the mind of the medical staff influences parents. It also became clear that the relationship with baby who die is also important. Parents need that their family and staff have tender look for their baby.

The medical staff learns how to care while puzzling, affecting parents' psychological support. It is expected to lead to concrete support practice clinically with this research result.

研究分野：臨床心理学

キーワード：中絶 心理 喪失 グリーフケア 臨床心理 周産期 心のケア サポート

1. 研究開始当初の背景

日本の周産期死亡率の低さは世界トップレベルである。しかし、日本産科婦人科学会によると妊娠の15%前後が流産に至り、厚生労働省によると2013年の死産数は2%の24,093件と報告されている。死産の内訳は自然死産10,934件と人工死産13,159件で、人工死産(人工妊娠中絶、以下中絶)が自然死産を上回っている。中絶を含む周産期喪失では、喪失対象である胎児は家族や周囲にとってまだ見ぬ存在であることから「なかったこと」「早く忘れた方がよいこと」として扱われる(橋本、2004)傾向にある。そのため母親が孤独感を抱く事も少なくない(管生、2008)。周産期喪失時の悲嘆反応は自然な反応であるが、数カ月以内に顕著な心理的症状が現れることも明らかとなっており(管生、2011) 場合によっては悲嘆過程が長期化したり病的なものにつながる危険性もある。そして、それらは後の精神状態や、後の妊娠出産育児、夫婦・家族関係にも影響を及ぼす。周産期喪失の中でも特に中絶は「自分で選んだ」という思いから、当事者自らサポートを求めにくい。中絶後の心理的諸問題として、PTSD様反応や抑うつ状態、短期間長期間にわたるネガティブな反応が報告されている(常盤ら、2003、管生、2012)。さらに中期中絶の看護を行う医療スタッフに関しても二次的ストレスや代理受傷の問題があり、看護者自身が防衛的にならざるを得ない(下山、2010)とも言われている。

適切な心理的サポートや心理教育が求められているにもかかわらず、臨床心理学領域では中絶を含む周産期喪失前後の心理的援助に関する先行研究や実践報告が少なく、周産期喪失に特化した専門的知識を持つ臨床心理士の数も限られている。産科医療現場ではスタッフが懸命に心身のケアを行っているが、専門的な心理ケアに限界があるのが現状である。また、医療スタッフ自身が周産期喪失のケアを行う時の葛藤や二次的ストレス、代理受傷に関して、心理の専門家によるコンサルテーションや研修など、心理臨床家の視点が持ち込まれることで、より効果的なケアが期待出来る。

2. 研究の目的

周産期喪失には心理的ケアの提供が必須である。新たな出生前診断による中絶も含め、中絶を経験した退院後の親とそのケアに関わる医療スタッフと心理専門職の積極的な連携につなげるため、本研究では(1)母体や胎児の重篤な異常で中期中絶をした親の退院後の心理的側面を調査する(2)医療スタッフのケア体験を把握し心理的構造を明らかにする(3)周産期喪失の心理的ケアのニーズや効果を検討する、以上3点について研究を行う。

3. 研究の方法

(1)中期中絶を主とした周産期喪失経験のある退院後の親を対象とし、その心理的側面の把握と心理的ケアのニーズについて調査を行う。インタビュー調査および質問紙調査を実施しデータ収集および分析を行う。インタビュー調査によるデータは個別性が高いため事例的に内容を詳細に読み込み分析する。これらの結果から当事者にとっての体験の意味を捉え、心理的ケアの在り方を検討する。

(2)日本国内の産婦人科施設等に勤務する、もしくは勤務経験のある医療従事者を対象とし、中期中絶を中心とした周産期喪失のケア経験の有無、どのような思いを持ちながらケアに携わっているか、困難と感じる点や葛藤、周産期喪失に関連する研修教育の機会等の有無、臨床心理士などとの多職種連携についてインタビューおよび質問紙による調査を実施する。

4. 研究成果

(1)中絶を経験した親の心理プロセスとケアへのニーズ

妊娠中期で中絶を選択した母親は、その体験を受け止めるプロセスにおいて、受診のきっかけや医師からの説明と診断がどのようなものであったのかによる影響を受け、また先の見えなさからの解放選択に対する迷い分娩を迎えることを受け止める可否といった影響を受けながら心理的揺れ心理的揺れの収まりを循環的に繰り返し自己の回復自己の回復の困難へと変遷してゆくことが明らかになった。体験を受け止めるということは、生まれることが出来なかったわが子を迎え、受け止めるということであり、それは親が今の自分自身を受け入れることにもつながるものと考えられた。

母親が夫や家族をはじめとする周囲の人々に求めるものは「我が子」への眼差しであり「この子がちゃんと居た」ことを共有できる関係であることが明らかになった。また、中絶の語りでは行為主体者が変化してゆく。「手術」という第三者が主体となる表現から「生まれる」という赤ちゃんが主体となる可能性を含む表現に変化し、語りが進むと「産んだ」という母親自身が行為主体者となる表現をとる。同時に「出てきて」と赤ちゃんが行為主体者となる語りへ変化した。語りに現れる主体の変化は母親の体験と心理に大きく影響していることが示唆された。

(2)医療スタッフが心理職に求めるケアニーズとケアの現状

協力が得られた周産期喪失のケアに関わる医療機関で質問紙調査を実施した結果、心理専門職が未配置の機関では、心理職への期待が心理職配置ありの施設に比べ有意に低くなっていた。これは心理専門職の業務や協

働が具体的にイメージしにくいことが影響していることが要因となっており、心理専門職が配置されている場合には、その期待度が高く、協働によるメリットが充分認知されているものと考えられた。周産期喪失について、医療スタッフが心理専門職に求める具体的な内容としては、周産期喪失をした親への積極的な心理的ケアが90.7%(医療スタッフが要請した場合51.6%、要請せずともの場合39.1%)であり、スタッフへの心理的サポートが29.7%、心理的ケアに関する研修42.2%、カンファレンスへの参加26.6%であった。これらのことから、親への心理的ケアの必要性が医療スタッフに認識されており、心理専門職の介入が求められていることが明らかとなった。

周産期喪失のケアに携わる際の困惑感や、専門職としてどのようなケアを提供できるのか、母親に寄り添うためにどのように自分自身があればよいのか、自身の気持ちの持ち様などが語られた。ケアの現状としては、スタッフ間、施設間で差がある。また、臨床心理士の配置については、ポジティブな感情が語られるものの、協働についての具体的なイメージがしにくい印象であり、質問票調査の結果とも併せて検討すると、今後公認心理師が医療現場に入ってゆくと、心理専門職の存在や協働の具体的なあり方を積極的に発信してゆく必要があると考えられた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 8件)

SUGAO Shoko, YASUMOTO Saori, SHAPKINA Nadia(2018) The Role of A DOULA DURING THE Process of Perinatal Loss in the U.S. Osaka Human Sciences, Vol.4, pp.49-59.

菅生聖子, Wretmark Astrid(2018)スウェーデン医療機関における周産期喪失ケアへの多職種連携 大阪大学教育学年報、23巻、pp.127-136.

SUGAO Shoko(2017) For Providing Grief Care during the Perinatal Period: From the position of a clinical psychologist, Osaka Human Sciences, Vol.3, pp.185-191.

菅生聖子(2017)人工死産経験者の体験の受け止めに関する調査研究 グラウンデッド・セオリー・アプローチによる分析を用いて、心理臨床学研究、35巻、pp.39-49.

菅生聖子, 安元佐織, Shapkina Nadia(2017)アメリカの周産期喪失過程におけるドゥーラの役割、大阪大学大学院人間科学研究科紀要、43巻、pp.53-65.

SUGAO Shoko(2016) Clinical Psychological Research on Women with Experience of Abortion Early in Pregnancy, Osaka Human Sciences Vol.2, pp.43-52.

菅生聖子(2016)周産期の親を支えるドゥーラの役割 臨床心理学的視点から、大阪大学教育学年報、21巻、pp.145-152.

SUGAO Shoko(2015)Psychological impact of perinatal loss concurrent with successful childrearing: Enhancing support for mothers, Osaka Human Sciences Vol.1, pp.159-168.

[学会発表](計 8件)

菅生聖子(2017)医学的理由により人工妊娠中絶をした母親の「我が子」への体験のあり方 現象学的手法による分析の試み、日本質的心理学会第14回大会.

菅生聖子(2017)周産期領域における臨床心理士協働の可能性-産科での周産期喪失への心理的ケア、日本心理臨床学会第36回大会.

SUGAO Shoko, YASUMOTO Saori(2016) Development of couplehood and parenthood through experience of miscarriage/stillbirth, 31st International Congress of Psychology, Yokohama Japan.

YASUMOTO Saori, SUGAO Shoko(2016) Qualitative analysis transition of men's role through their partner's miscarriage/stillbirth, 31st International Congress of Psychology, Yokohama Japan.

SUGAO Shoko(2016)Induced Stillbirth Self-help Group in Practice, 18th International Congress of the International Society of Psychosomatic Obstetrics and Gynecology, Malaga Spain.

菅生聖子, 安元佐織(2015)流産・死産経験を体験した夫婦が互いの関係の変化から受ける影響 母親へのインタビュー調査から、日本発達心理学会第26回大会.

安元佐織, 菅生聖子(2015)流産・死産経験を体験した夫婦が互いの関係の変化から受ける影響 父親へのインタビュー調査から、日本発達心理学会第26回大会.

菅生聖子(2015)人工死産を選択した母親の語りの分析 -インタビュー調査からの一考察 -、第34回日本心理臨床学会.

〔図書〕(計 1件)

管生聖子 他、大阪大学出版、体験型ワーク
で学ぶ教育相談、2015.280 .

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

取得状況(計 0件)

〔その他〕

ホームページ等

6 . 研究組織

(1)研究代表者

管生 聖子 (SUGAO, Shoko)

大阪大学・大学院人間科学研究科・助教

研究者番号：50637139